

永樂帝の廟號について (1)

Temple Names of the Yongle Emperor (1)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

This paper examines the circumstances involved in the change of the Yongle Emperor's temple name from Taizong to Chengzu. The investigation reveals that the reason for this lay with the Jiajing Emperor, Shizong — originally a collateral family relative who acceded to the throne — who wanted to have his father, Prince Xingxian, granted the title “emperor.” — This change of temple name led to a significant transformation in the evaluation of Yongle. The paper also shows how officials of the day strove to provide a theoretical justification, from the perspective of classical studies, for the change from Taizong to Chengzu.

はじめに

永樂帝⁽¹⁾ (元・至正二十年〔一三六〇〕～明・永樂二十二年〔一四二四]) の廟號は、永樂二十二年 (一四二四) 九月に、

諡號：體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝

廟號：太宗

と贈られる。それが、嘉靖十七年 (一五三八) 九月になって、世宗嘉靖帝によって、

諡號：啓天弘道高明肇運聖武神功純仁至孝文皇帝

廟號：成祖

(1) 太祖洪武帝朱元璋の第四子にあたる朱棣 (永樂帝) は、廟號からいうと、「太宗」・「成祖」とふたつの呼び方があり、諡號の「文皇帝 (文帝)」で呼ぶと、歴代の「文帝」と紛らわしくなる。そこで、拙稿では年號によって永樂帝と呼ぶことにする。

と変更される。最初は「太宗」であったものが、後に「成祖」となるのである。なお、清政権の編纂した欽定『明史』では、改められてからの廟號・諡號とを用いる。

以下で検討するが、本来の諡號の「文」に加えられた「體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝」十六字の尊號が「啓天弘道高明肇運聖武神功純仁至孝」に変更されたのは、「太宗」から「成祖」へ改められたことによる、部分的な修正であろう。

そもそも、子孫の皇帝が、一度決められた先祖の「廟號」を変更するのは、特別な理由がないかぎり、あまり行なわれることではない。そこで、拙稿では、どうして世宗嘉靖帝が変更したのか、その結果、廟號を通してみた永樂帝の評価はどう変化したのかなどを検討してみたい。

そのため、まず永樂二十二年に贈られた諡號と廟號とがどのような評価をあらわすのかを考え、つづいて世宗嘉靖帝による変更の経緯やなぜそうしたのかなどを考え、最後に廟號を通してみた永樂帝に対する明・清時代の評価について考えてみたい。

(1)

仁宗『實錄』によると、永樂二十二年（一四二四）九月一日に永樂帝の遺命にしたがって、永樂五年に亡くなった永樂帝の徐皇后の神主を几筵に合祀する。それと同時に、永樂帝と徐皇后の諡號・廟號の提案がなされる。

永樂二十二年九月癸酉（一日）、仁宗孝皇后（永樂五年に亡くなった永樂帝の徐皇后）の神主を几筵に合祀す。大行皇帝（永樂帝）の治命（生前の遺言）に遵う、^{しか}云いう。禮部同じく文・武の郡^{ママ}（群）臣 大行皇帝（永樂帝）・仁孝皇后（徐皇后）の尊諡を進め、議（提案）して曰く、伏して惟うに天地の大・化育の^①妙は、得（得）て名づく可からず、然れども聖人 乾元^②・坤元^③の稱・「大いなるかな」・「至れるかな」の賛有る者は、其の道德功用の至盛極大を明らかにする所以にして、以て復た加うる無きなり。惟だ帝

と后とは天地に上つりて配し、其の功德 隆盛なれば、則ち尊號・徽稱は天に告げて之を薦め、諸を玉簡（玉質の簡札）に刻して、無極（無窮）なるを昭示（明白に示す）す。此れ達な不易の大典なり。恭しく惟うに大行皇帝（永樂帝）は正嫡を以て天位を履み、大にして能く化するの聖、聖にして測る可からざるの神を具え、天の行くを法とし天と徳を合わす。聰明睿智^④ 經慮弘遠（廣大にして深遠）なり。賞罰を行なうや、必ず信にして必ず公なり。郊廟を奉承（遵行）するに、必ず恭にして必ず誠あり。政令を宣布するに、悉く舊章に循^{したが}がう。恢弘（広範囲にわたる）なる神化（聖王の教化）は、廣大にして無外（無窮）なり。治理（統治）に勵精し、剛健にして息まず。内難を幾危（預兆）に靖^{やす}んじ、宗社を再安に保つ。交趾の郡縣を數千載の後に復し、莫比（漠北：モンゴル高原以北）の殘虜を數萬里の外に驅^おう。輿圖の廣きこと、曠古（古来）^{たぐい} 倫無し。康靖（安寧）を綏^{やす}んずじ、順を悉し服を悉さしむ。推誠（誠意）もて下に侍し、任用して疑わず。死刑を臨決するに、四五たび覆奏さす。才俊を登して以て圖治（国をうまく治める）し、學校を興して以て隆化す。五經・四書・性理の大全を輯め、摭（取捨）して善を為す。陰騭（『書經』洪範に「惟天陰騭下民」：ひそかにだまって定めること）されし孝順の明徽は、微を顯かにし幽を闡^{あき}らかにし（『易』繫辭傳下に「夫『易』彰往而察來、而微顯闡幽」）、訓を無極に垂る。制作の備わり・典章の華あるは、堯・舜・禹・湯・文・武の盛なりと雖も、是れ道（遵行）せざるなり。〔以下、徐皇后について述べる……〕仰して惟うに二聖（永樂帝と徐皇后）の靈御 天に在り、功德高明にして日月に比隆（同じように盛んであること）す。臣等 謹しみて古典に遵い、諡法を徵するに、大行皇帝遵^{ママ}（尊）諡は宜しく之に天錫（賜予）して「體天弘道高明廣遠聖武神功純仁至孝文皇帝」と曰い、廟號は「太宗」とし、仁孝皇后の尊諡は「仁孝慈懿誠明莊獻配天齊聖文皇后」と曰わん。謹しみて議（提案）す、と。上（仁宗洪熙帝）立ちどころに之を受け、覽畢りて流泣して已まず。遂に諡議を以て翰林院に付し、諡冊を撰せ

しむ（『大明仁宗敬天體道純成至德弘文欽武章聖達孝昭皇帝實錄』卷二上・「永樂二十二年九月癸酉（一日）」条）。

- ①『中庸』第二十二章に「能盡物之性，則可以贊天地之化育（能く物の性を盡くせば，則ち可以て天地の化育を^{たす}贊く可し）」。また、『中庸』第三十二章第一節に「唯天下至誠，爲能經綸天下之大經，立天下之大本，知天地之化育，夫焉有所倚（唯だ天下の至誠のみ，爲能く天下の大經を経綸し，天下の大本を立て，天地の化育を知ると爲す。夫れ焉^{いづく}ぞ倚る所有らん）」。
- ②『易』乾卦彖傳に「大哉乾元，萬物資始，乃統天（大いなるかな乾元，萬物^と資り始む，乃ち天を統ぶ）」。
- ③『易』坤卦彖傳に「至哉坤元，萬物資生，乃順承天（至れるかな坤元，萬物^と資り生ず，乃ち天に順承す）」。
- ④『易』繫辭傳上に「古之聰明叡知，神武而不殺者乎（古の聰明睿知^と神武にして殺さざる者か）」。また、『中庸』に「唯天下之至聖，爲能聰明睿知，足以有臨也（唯だ天下の至聖のみ，能く聰明睿知にして，以て臨む有るに足ると爲すなり）」。

天地のおおきさ，万物の造化育成の妙は，得られるけれども，名づけることはできないものである。しかし聖人が『易』で「大いなるかな乾元」・「至れるかな坤元」と称賛するのは，その道德の功用のきわめて盛んで極まっていることを明らかにするためであり，それに加えるものはない。ただ皇帝と皇后とは天地に配置するもので，その功績・徳行が盛んであれば，諡號・尊號は天に告げてそれを薦め，玉簡に刻してとこしえに示すのである。これはすべて不易の大典である。さて，つつしんで考えるに永樂帝は嫡子の身をもって天子の位を継がれた。偉大で教化する睿知を持ち，睿知を持ちばかり知れない神性を具え，天を法則とし，天と徳を台わし，その聰明睿知は，おおきく奥深いものであった。賞罰を行なうには，必ず信があり必ず公正であった。郊廟（天地・祖先を祭る）の祭祀を遵行するには，必ずうやうやしくし必ず誠があった。政令を施行するにあたっては旧令にしたがった。こうした広範囲にわたる教化は，広大できわめつくせないものである。統治に心血を注ぎ，熱意を持ちつつけて休まなかった。内なる危機を未然に防ぎ，宗廟社稷（国家）をふたたび安定させた。交趾

の支配を数千年ぶりに回復し、北方民族を数万里の外に追い払った。版図の広さは、古来並ぶ者がない。康靖（太平）をはかり、順服（服従）をつくすようにさせた。誠意をつくして下のものに接し、任用すると疑われなかった。死罪の決定には、何回も検討し直された。才能のある人物を登用して政治をうまく行くようにはかり、学校を興して教化を盛んにされた。「五經大全」・「四書大全」・「性理大全」を編纂し、取捨選択して善なるものとされた。[天によって] ひそかに定められた孝順の規律は、微かなところをはっきりさせ、目に見えない道理をはっきりさせて、おしえを限りなく示した。礼儀が備わり、制度が輝かしいのは、堯・舜・禹・湯・文・武の盛んであった時でも、できなかったことである。そこで、伏して思うに永樂帝と徐皇后お二人の御靈は天にあり、その功德は日月と同じように盛んである。そこで私たち臣下は謹んで古典を照らして、諡號を考えるに、永樂帝には、諡號を「體天弘道高明廣遠聖武神功純仁至孝文皇帝」とし、廟號は「太宗」、徐皇后には「仁孝慈懿誠明莊獻配天齊聖文皇后」という諡號をお贈りしたいと思い、ここに提案します、と群臣がいう。宣宗宣德帝は、すぐにこの提案を受け取り、ご覧になって涙がとまらなかった。とうとうこの提案を翰林院に送り、諡の玉冊を撰せしめた、という。

なお、ここで作成された玉冊の文章と、それを踏まえて作成された永樂『實錄』末尾の永樂帝の治世の総括とは、廟號を通してみた永樂帝に対する明・清時代の評価を検討する際に考えてみたい。

ちなみに、陳建（字は廷肇、号は清瀾。廣東東莞の人。弘治十年（一四九七）～隆慶元年（一五六七）。嘉靖七年（一五二八）の舉人）の『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』においても、諡號と廟號とを贈ったのは、仁宗「實錄」と同じく「永樂二十二年九月一日」とする。

[永樂二十二年] 九月癸酉朔、大行皇帝に諡を上つりて「體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝」と曰い、廟號は「太宗」とす。嘉靖中に至り、廟號を改めて「成祖」と曰う（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之九・仁宗昭皇帝紀・「甲辰 永樂二十二年九月癸酉朔」条）。

ただ、談遷（原名は以訓，字は孺木・仲木，号は射父・觀若・容膝軒・江左遺民。浙江海寧の人。明・萬曆二十二年〔一五九四〕～清・順治十四年〔一六五七〕）の『國榷』の九月一日条には、徐皇后の神主を几筵に合祀したことのみに記す。

〔永樂二十二年九月〕癸酉朔（一日），仁孝皇后（永樂五年に亡くなった永樂帝の徐皇后）の主を几筵に奉ず。先命に遵うなり（『國榷』卷十八・「成祖永樂二十二年九月癸酉朔（一日）」条・一二一九頁：拙稿では『國榷』は、張宗祥が校點し、中華書局によって一九八八年第二次印刷（一九五八年第一版発行）された活字本を用いる）。

諡號と廟號とが贈られたことは九月九日に掛けている。

〔成祖永樂二十二年九月〕辛巳（九日），太宗（永樂帝）に「體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝」・〔永樂五年に亡くなった永樂帝の徐皇后に〕「仁孝慈懿誠明莊獻配天齊聖文皇后」の尊諡を上つる（『國榷』卷十八・「成祖永樂二十二年九月辛巳（九日）」条・一二二一頁・一二二一頁）。

そして、その翌日に「諡詔」が公布されたという。

〔永樂二十二年九月〕壬午（十日），諡詔を頒^{たま}う（『國榷』卷十八・「成祖永樂二十二年九月壬午（十日）」条・一二二二頁）。

さて、永樂帝に贈られた「體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝」という諡號と「太宗」という廟號とはどのような意味を持っていたのであろうか。

まず諡號の文字数であるが、王弘撰（字は無異，又の字は文修，號は山史，又の號は待庵。陝西華陰の人。明・天啓二年〔一六二二〕～清・康熙四十一年〔一七〇二〕）は、

帝王の諡有るや，古は或いは一字を用い，或いは二字を用う。今の制は，帝の諡は一字なり，而して上に更に十六字を用う……（『山志』初集卷四・「諡法」条）。

という。

また、查繼佐（字は伊璜，号は東山。浙江海寧の人。明・萬曆二十九年〔一六〇一〕～清・康熙十六年〔一六七七〕）の『罪惟錄』によると、

初め制を定めるに、皇帝の崩じ、諡^{かんが}を工^{かんが}うるに、率ね十六字にして、摠^すぶるに一字を以てす。皇后は十二字を用い、帝の諡^{かんが}の統^すぶるに一字を以てするに従う（『罪惟録』卷之七・志・諡典）。

という。つまり、明朝において、皇帝に贈られた十七字の諡號のうち、最後の一字が十六字を統べる本来の諡となり、そのうえの十六字は、増加された諡（尊號）ということになる。

したがって、一字の本来の諡に十六字の増加された諡（尊號）を加えると、『明史』でいう十七字となる。

凡そ諡は、帝十七字、后十三字、妃・太子・太子妃並びに二字、親王一字、郡王二字、字を以て差を爲す（欽定『明史』卷七十二・志第四十八・職官一・十九葉）。

では、永樂帝に贈られた諡（尊號）の「體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝」の十六字はどのような出典をふまえて撰せられたのだろうか。浅学の私が調べたため至らないところばかりではあるが、いまのところ次のようなものではないかと考える。

體天：

『文選』卷十一所収の何晏「景福殿賦」に「大哉惟魏，世有哲聖，武創元基，文集大命，皆體天作制，順時立政，至于帝皇，遂重熙而累盛也（大いなるかな、惟れ魏，世々哲聖有り。武〔帝〕は元基^{はじ}を創め，文〔帝〕は大命^なを集す。皆な天に體して制^なを作し，時に順って政を立つ。帝皇（明帝）に至り，遂に重熙にして累盛なり）」。

弘道：

『論語』衛靈公「人能弘道，非道弘人（人 能く道^{ひろ}を弘む，道 人を弘むに非ず）」。

高明：

『中庸』第二十六章・第三節に「徵則悠遠，悠遠則博厚，博厚則高明（徴あれば則ち悠遠なり，悠遠なれば則ち博厚なり，博厚なれば則ち高明なり）」。

廣運：

『書經』大禹謨に「帝德廣運，乃聖乃神，乃武乃文（帝德 廣運せり，乃ち聖，乃ち神，乃ち武，乃ち文）：堯帝の德はひろくはるかな土地まで及ぶ」。

聖武：

『書經』伊訓に「惟我商王，布昭聖武，代虐以寬，兆民允懷（惟れ我が商王，聖武^{し あきら}を布き昭かにし，虐に代わるに寬を以てし，兆民^{まこと} 允に懷く）わが商のきみの湯王は，聖德と武威とを敷き輝かし，桀王の殘虐さに代えるに，寬容⁽²⁾の心を用いられた。そこで天下の民は心から懷いた」。

神功：

『文選』卷第四十所収の任昉「到大司馬記室牋」に「神功無紀，作物何稱（神功は紀す無く，物を作ることは何ぞ稱せん）：神のような功績は記述することなどできないし，その功績は名づけようもない」。

純仁：

『文選』卷第九所収の楊子雲「長楊賦」に「今朝廷純仁，遵道顯義，并包書林，聖風雲靡，英華沈浮，洋溢八區，普天所覆，莫不沾濡（今，朝廷 純仁にして，道に遵い義を顯わし，書林（学問の林）を并せ包ねて，聖風（帝王の感化） 雲のごとく靡^{なび}き，英華のごとく沈浮（あちこち咲く）して，八區（天下）に洋溢（充ち溢れる）す。普天の覆^{おお}う所，沾濡（潤う）せざるは莫し）」。

至孝：

(2) 蔡沈（字は仲默。建陽の人。宋・乾道三年〔一一六七〕～宋・紹定三年〔一二三〇〕）は、『書經』のこの条に対して，つぎのような注をしている。

「布昭^{し あきら}とは敷き著かなり。「聖德」とは，猶お『易』（繫辭傳上）の所謂ゆる「神武にして殺さざる者」なり。湯の德威は天下に敷き著かにして，桀の虐^{し あきら}に代わるに吾の寬を以てす。故に天下の民 信にして之に懷けり。

①『易』繫辭傳上に「古の聰明睿知 神武にして殺さざる者か（むかしの聡明で睿知のある人，神のような武勇がありながら殺人を行なわない人だろうか）」。

『禮記』祭義に「至孝近乎王，至弟近乎霸。至孝近乎王，雖天子必有父，至弟近乎霸，雖諸侯必有兄（至孝は王たるに近く，至弟は霸たるに近し。至孝は王たるに近しとは，天子と雖も必ず父有ればなり。至弟は霸たるに近しとは，諸侯と雖も必ず兄有ればなり）」。

このような出拠を踏まえているとしたならば，

天命にしたがい，道をおしひろめ，[功績が] 高く明らかなであり，[その徳は] ひろくはるかなところまでとどき，[神のような武勇がありながら殺人を行なわないという] 聖徳と武威とをもち，神のような功績があり，[その治政は] 純粋な仁の徳があり，[『禮記』祭義でいう王者に近いという] 至孝の持ち主，

といった意味になるのではないだろうか。

当然の事であるが，この諡号（尊号）は，いま検討した永樂帝の諡號・廟號が提案された上奉文で述べられた永樂帝の治世の総括を踏まえてのものであることが理解できるのではないだろうか。

では，十六字の尊號を統べる本来の諡號である「文」字はどうであろうか。「文」字は、『通志』諡略で，「上諡法」の百三十一字の一字に分類され，

右，百三十一の諡は，之を君親に用う・之を君子に用う『通志』（卷四十六・諡略第一・諡中）。

とされる。君主や君子に用いる文字であるという。⁽³⁾

『史記』正義に引用される「諡法解」によると，つぎのようにある。

天地を經緯するを文と曰う（經緯天地曰文） [晉・孔晁注:] 其の道を成す
 道德ありて博厚なるを文と曰う（道德博厚曰文） [晉・孔晁注:] 知らざる無し
 學勤め好みて問うを文と曰う（學勤好問曰文） [晉・孔晁注:] 下問を恥じず
 慈惠もて民を愛するを文と曰う（慈惠愛民曰文） [晉・孔晁注:] 惠もて以て政を成す
 民を^{あわ}愍れみ惠もて禮するを文と曰う（愍民惠禮曰文） [晉・孔晁注:] 惠にして禮有り

民に爵位^{あた}を錫うを文と曰う（錫民爵位曰文）〔晉・孔晁注〕^{とも}與に同じく^{のぼ}升る
『逸周書』諡法解では、「道德博聞曰文」を「道德博厚曰文」に作る以外は同じである。朱右曾は、『逸周書集訓校釋』（道光二十六年〔一八四六〕序）において、

能く天地の道に經緯順從す。徳の盛んなり。/「博厚」は、廣博にして深厚なり。/學び問うは、文理を成す所以なり。/『論衡』（福虛篇第二十）に曰く「文とは徳惠^マの衣（表）なり」と。呂覽（侍君覽・召類）に「文とは愛の徴なり」と。/民を憂いて理に順えば（憂民而順理），則ち政事斐然たり。/〔「道德博厚曰文」の〕「博厚」は、盧〔文弼〕「史記正義」に據りて「博聞」に作る。茲^{こゝ}は元本に依る。「勤學」は舊と倒す。茲^{こゝ}は『通鑑前編』に據りて訂す。『左傳正義』に又た「忠信もて禮に接するを文と曰う（忠信接禮曰文）」有り（『逸周書集訓校釋』卷六・諡法第五十四・「經緯天地曰文／道德博厚曰文／勤學好問曰文／慈惠愛民曰文／愍民惠禮曰

- ✓（3）そもそも『通志』を編纂した鄭樵（字は漁仲。莆田の人。宋・崇寧三年〔一一〇四〕～紹興三十二年〔一一六二〕）は、「諡法解」などの諡法の説明は不要であると考えてる。

……臣（鄭樵）今は只だ一つの「文」に即して以て義を見る。「文」に即せば以て「文」を見る可し。必ずしも「施而中理曰文」・「經緯天地曰文」と曰わず。「武」に即して以て「武」を見る可し。必ずしも「克定禍亂曰武」・「保大定功曰武」と曰わず。「孝」に即して以て「孝」を見る可し。必ずしも「慈惠愛親曰孝」・「能養能恭曰孝」と曰わず。「忠」に即して以て「忠」を見る可し。必ずしも「盛衰純固曰忠」・「臨患不忘曰忠」と曰わず。且つ文〔字〕に即きて以て義を見れば、則ち文〔字〕は簡にして、義は顯らかなり。文〔字〕を舍きて説に従えば、則ち説は多く、義は惑う……（『通志』卷四十六・諡略第一・諡下・「後論第一」）。

また、

語に曰く、「孔文子 何を以て之を文と謂うか、と。子 曰く、敏にして學を好み、下問を恥じず。是を以て之を文と謂う、と」（『論語』公冶長）と。然らば則ち文子の諡は初めは諡法無し。仲尼は則ち問わるに因り、其の人の行事に即し以て之を釋す。奈何ぞ先ず其の法を立て必ず人をして之れ曲中（完全に符合）せしめんや。規矩は本より方圓の爲に設く、豫^{あらかじめ}め小大の劑量（大きさをきめる）を爲して、制器する者をして此に範圍せしむに非ず。況や作る所の法は只だ經傳の言を採るのみにして、其の間に大いに通理ぜざるの處有るをや……（『通志』卷四十六・諡略第一・諡下・「後論第四」）。

ともいう。

文 / 錫民爵位曰文」条)。

と注釈し、文字の校勘を示す。

また、陳逢衡の『逸周書補注』(道光五年〔一八二五〕刊)は、つぎのような注釈を加える。

天地を經緯するを文と曰う(經緯天地曰文)『獨斷』同じ

孔〔晁〕注:其の道を成すなり。

補注:天地を經緯すること周の文王の如き是れなり。『詩〔經〕』(大雅)の「皇矣」の「文王に比す(比于文王)」の〔毛〕傳・『左〔傳〕』襄〔公〕二十八年の傳・「周語」(『國語』周語上に引用される『詩經』周頌・思文)の「思文后稷」の注は並びに「天地を經緯するを文と曰う(經緯天地曰文)」と云う。『書〔經〕』堯典の「欽明文思,安んずるを安んず(欽明文思,安安)」の馬注・鄭注は並びに「天地を經緯する之を文と謂う(經緯天地謂之文)」と云う。又た『左〔傳〕』〔襄公〕二十八年の傳の服〔虔〕注に「德は能く天地の道に經緯順從す。故に文と曰う(德能經緯順從天地之道,故曰文)」と(『逸周書補注』卷十四・七葉・「經緯天地曰文」条)。

道德ありて博聞なるを文と曰う(道德博聞曰文)『禮〔記〕』檀弓〔下〕の「公叔文子」疏・唐の「〔駁〕楊綰謚〔文端〕議」並びに同じ

孔〔晁〕注:之を知らざる無し。

補注:道德博聞なること孔子の如き是れなり。宋の夏竦 始めて「文正」と謚さる。司馬光 奏して曰く、謚法の本意は所謂ゆる「道德博聞なるを文と曰う」者なり、聞見博雅の謂に非ざるなり、と(『逸周書補注』卷十四・七葉・「道德博聞曰文」条)。

學を勤め問うことを好むを文と曰う(勤學好問曰文)舊とは「學勤」に作る。『史記』正義 同じ。今、欽定『續通志』に従いて改む。

孔〔晁〕注:下問を恥じず。

補注:『論語』(公冶長)に子貢 問うて曰く、孔文子 何を以て之を「文」

と謂うか、と。子 曰く、敏にして學を好み、下問を恥じず。^こ是を以て之を「文」と謂う、と。疏に「案ずるに諡法に學を勤め問うことを好むを文と曰う（勤學好問曰文）」と（『逸周書補注』卷十四・七葉～八葉・「勤學好問曰文」条）。

慈惠もて民を愛するを文と曰う（慈惠愛民曰文）『白虎通』（卷上・「諡」条）引く『禮記』の「諡法」・『漢書』の「孝文皇帝」条の注・『左傳』の「文公」の釋文及び疏・『穀梁』の「文公」の疏・『論語』（憲問）の「公叔文子」の疏 引きて並びに同じ。

孔〔晁〕注：惠 以て文を成す。「文」は盧〔文昭の校勘した『抱經堂叢書』所収〕本『史記正義』に従いて「政」に作る。

補注：慈惠もて民を愛するは、漢の孝文帝の如き是れなり。春秋の時、邾文公 繹に遷〔都〕するをトす。志は民を利するに在り。亦た慈惠愛民の一證なり。繹に遷〔都〕するの事は魯の文公の十三年に在り。『孟子』滕文公の疏に其の能く慈惠もて民を愛するを以ての故に「文」を以て諡と爲す、と（『逸周書補注』卷十四・八葉・「慈惠愛民曰文」条）。

民を^{あわ}愍れみ惠もて禮するを文と曰う（愍民惠禮曰文）

孔〔晁〕注：禮を以て人を安んず（以禮安人）盧〔文昭の校勘した『抱經堂叢書』所収〕本『史記正義』に従いて「惠而有禮」に作る。

補注：なし（『逸周書補注』卷十四・八葉・「愍民惠禮曰文」条）。

民に^{あた}爵位を錫うを文と曰う（錫民爵位曰文）。

孔〔晁〕注：^{とも}與に同じく^{のぼ}升るなり。^も舊とは「舉可舉也（舉ぐる可きを舉ぐるなり）」に作る。今、『史記正義』に従う。

補注：『論語』（憲問）に「公叔文子の臣の大夫の僕 文子と同じく諸公に^{のぼ}升る。子 之を聞きて曰く、以て「文」と爲す可し（公叔文子之臣大夫僕、與文子同升諸公。子聞之曰、可以爲文矣）」と。疏は諡法に「民に爵位を^{あた}錫うを文と曰う（錫民爵位曰文）」を以ての故とするなり（『逸周書補注』卷十四・八葉・「錫民爵位曰文」条）。

さらに、欽定『續通志』（乾隆五十年〔一七八五〕成る）は、「諡法解」の条

において、つぎのような注釈をつける。

天地を經緯するを文と曰う（經緯天地曰文）・道德博厚なるを文と曰う（道德博厚曰文）・學勤め好みて問うを文と曰う（學勤好問曰文）・慈惠もて民を愛するを文と曰う（慈惠愛民曰文）・民を^{あわ}愍れみ惠もて禮するを文と曰う（愍民惠禮曰文）・民に爵位を^{あた}錫うを文と曰う（錫民爵位曰文）「道德博厚」は、『史記』正義に「道德博聞」に作る。孔晃の注に「知らざる無し（無不知）」と云うを放えるに、則ち「博聞」に作る者は正しきと爲す。「學勤好問」は、明の王圻の『諡法考』の載せる所の「周諡法」に「勤學」に作る。蘇洵諸家並びに同じきなれば、則ち「勤學」に作る者は正しと爲す。『獨斷』は「天地を經緯するを文と曰う（經緯天地曰文）」とのみあり。

「天地を經緯する」は、周の文公 是れなり。「學に勤め問うを好む」は、衛の孔文子 是れなり。「慈惠もて民を愛す」は、漢の孝文帝 是れなり。「民に爵位を^{あた}錫う」は、衛の公叔文子 是れなり。陸德明の「左傳」の「釋文」の「魯文公」の下に於いて「諡法」の「忠信もて禮に接するを文と曰う（忠信接禮曰文）」を引く。今の「諡法」に此の語無し。當に即ち是れ「民を^{あわ}愍れみ惠もて禮する（愍民惠禮）」の譌なるべし。陸〔德明〕 異本に據るの故なり（欽定『續通志』卷一百十九・諡略上・「周書諡法解」条）。すると「諡法解」では、「文」字は、

天地を秩序だてる・道德的であり知らないことがない・學問に熱心で質問することを恥ずかしいとしない・慈惠の心をもって人々をいつくしむ・人々をあわれんで禮を用いて安んじる・[自分の立場などはかまわずに] 人に爵位をあたえる、

などの意味を持つと考えられていたといえる。

では、蘇洵（字は明允、老蘇と称される。今の四川眉山の人。宋・大中祥符二年〔一〇〇九〕～治平三年〔一〇六六〕）の「諡法」は、どうであろうか。「諡法」ではつぎのように説明される。

施して理に中る^{あた}を文と曰う（施而中理曰文）

新しく補するなり。舊法の^①「施せば文と爲り、除けば武と爲す（施爲文、除爲武）」とは、文理の謂いなり。施して理に中らざるは、未だ文と爲るを得ざるに由るなり。蓋し「文」の義爲るや廣し。古の文王 乃ち之に當るを得。惟れ其の施して理に中らざるは無し、云うのみ。孔文子・公叔文子・仲尼に至るに皆な「文」を以て之を許す。是れ一節の理に中る者なり。故に其の諡を觀て、其の諡する所以を考えれば、「文」の大小は乃ち見わる。蓋し行の理に中りて以て「文」と爲す可き者は、其の實 廣くするに勝う可からざるなり。故に舊法の所謂ゆる「文」にして、義を害せざる者を取り、之を著わす。後世の君子 苟し施して理に中る者有れば、皆な「文」を以て之に諡す可し。法の及ばざる所と雖も、可なり。

①『史記』正義所引の「諡法解」や『逸周書』諡法解は、「徳を施すを文と爲し、惡を除くを武と爲す（施徳爲文、除惡爲武）」に作る。

天地を経緯するを文と曰う（經緯天地曰文）

『國語』（周語下）に單子 曰く、「之を経するに天を以てし、之を緯するに地を以てす。經緯の爽^{たが}わざるは、「文」の象なり」と。晉の大夫も亦た云う。「明」[字の] 注に見ゆ。

敏にして學を好むを文と曰う（敏而好學曰文）

語（『論語』公冶長）に云う、孔文子 何を以て之を「文」と謂うか、と。孔子 曰く、敏にして學を好み、下問を耻じず。是^{ここ}を以て之を「文」と謂う、と。

徳を脩めて遠きを來たすを文と曰う（脩徳來遠曰文）

孔子 曰く、遠人 服せざれば、則ち文徳を脩めて以て之を來^きたす（『論語』季氏）。

忠信もて禮に接するを文と曰う（忠信接禮曰文）

劉熙^{おも} 以爲えらく之を本づくるに忠信を以てし、之を繼ぐに禮樂を以て

す。斯れ「文」と爲す、と。

道德ありて博聞なるを文と曰う（道德博聞曰文）

博聞にして徳無ければ、固より「文」と爲すを得ず。道德有るも、聞くこと博からざれば、亦た徒だ以て徳ありと爲す可くして未だ以て「文」と爲す可からざるなり。惟だ道德ありて博聞にして後に「文」なり。

剛柔相^{たす}い濟くを文と曰う（剛柔相濟曰文）

新たに舊法の「寛にして慢ならず、「廉にして^{やぶ}劇らざる」（『禮記』聘義）を文と曰う（寛而不慢、廉而不劇曰文）」、又た「寛立にして慢ならず、堅強にして暴ならざるを文と曰う（寛立不慢、堅強不暴曰文）」を改む。能く剛柔相^{たす}い濟くの謂なり。

班制を修治するを文と曰う（修治班制曰文）

〔『禮記』檀弓下〕衛の公孫枝（『禮記』檀弓下は「拔」に作る）卒し、其の子の戊 諡を君に請う。君 曰く、昔者、^{むかし}衛國 凶饑せしとき、夫子 粥^{つく}を爲りて、國の餓ゆる者に與う。是れ亦た惠ならずや。^{むかし}昔者、衛國 難^{まも}有りしとき、夫子 其の死を以て寡人を衛れり。亦た貞ならずや。夫子 衛國の政を聴きしとき、其の班制〔鄭玄注に「班制とは、尊卑の差を謂う」〕を修め、以て四鄰と交わり、衛國の社稷 辱められず。亦た文ならずや。故に夫子を「貞惠文子」と謂う（蘇洵「諡法」卷一・「文八」条）。

とある。

蘇洵の「諡法」では、

施しかたが理になっている・天地を秩序だてる・明敏で学問を好む・徳を修めて〔感化し〕、遠くに居る人を帰服させる・忠信に本づき、それに禮樂をつづける・道徳的であり知らないことがない・剛柔が助けあうこと・秩序を修め整えること、

などの意味を持つ文字であるとされたと説明されている。

なお、王世貞（字は元美、号は鳳洲、又の号は弇州山人。江蘇太倉の人。明

・嘉靖五年〔一五二六〕～萬曆十八年〔一五九〇〕。嘉靖二十六年丁未科（一五四七）二甲八十名の進士）は、『弇山堂別集』（卷七十・諡法一・「一字諡」条）で、永樂帝の諡として用いられた「文」字をつぎのように説明する。

文

文皇帝、即ち成祖の帝號なり。諡法に「天を經し地を緯するを文と曰う（經^マ天緯^マ地曰文）」と（『弇山堂別集』卷七十・諡法一・「一字諡」条）。

王世貞は、「天を經し地を緯するを文と曰う」という意味からのみ永樂帝の諡號の「文」が、用いられたと考える。すると、「天地を秩序だてた」皇帝ということになる。

では、廟號に用いられた「太宗」はどうであろうか。まず、「宗」字について考えてみたい。

毛奇齡（字は大可、西河先生と称される。浙江蕭山の人。明・天啓三年〔一六二三〕～清・康熙五十五年〔一七一六〕。康熙十八年己未科博學鴻儒の第二等十九名）は、君主を「宗」と称するのは、何によっているか理解しているのだろうか、と問いを立てて「宗」字について説明してゆく。

試みに問うに、今の禮を議する者は亦た人主の「宗」と稱するは果たして何れの説なるかを知るや。三代「宗」と稱する者無し。祇だ殷太甲を以て太宗と爲し、太戊もて中宗と爲し、武丁もて高宗と爲す。之を「三宗」と謂う。而して漢より後、之に遵う。當時の禮を議する者は、確として「祖に功有り、宗に徳有り」（『史記』孝文本紀／『漢書』景帝紀）の一語を守る。因りて開代の功有る者を以て之を稱して「祖」と爲し、其の餘の徳有るものは則ち概ね「宗」を以て之を稱す。〔それは〕西漢は高祖を以て「太祖」と稱し、孝文もて「太宗」と稱し、孝武もて「世宗」と稱し、東漢は光武を以て「世祖」と稱し、孝明もて「顯宗」と稱し、孝章もて「肅宗」と稱するが如し。皆な之を定めて百世不祧の名と爲す。而して餘は俱に之無し（『大禮議』卷二・二十四葉：嘉慶元年〔一七九六〕序・蕭山陸凝瑞堂藏版重輯『毛西河全集』所収による：以下同じ）。

夏・殷・周の三代では、「宗」と称したものはなかった。ただ殷の太甲を「太宗」と称し、殷の太戊を「中宗」と称し、殷の武丁を「高宗」と称して、これを「三宗」といった。漢代より後は、それにしがった。当時の礼を議論する者たちは、たしかに「祖に功有り、宗に徳有り」（『史記』孝文本紀／『漢書』景帝紀）のことは守っていたのである。そこから最初に王朝を開いた功績のある者を「祖」と称して、それ以外の徳のある者にはだいたい「宗」をもちいた。それは、前漢では高祖を以て「太祖」と称し、文帝を「太宗」と称し、武帝を「世宗」と称し、後漢では光武帝を「世祖」と称し、明帝を「顯宗」と称し、章帝を「肅宗」と称したようなものである。すべてこれを「百世不祧（永遠に廟堂内で移動しない）」のものとした。そして、これら以外は、「宗」と称することはなかった、という。

ところが唐代になって、その儀礼制度が変更され、最初に王朝を開いた者を「祖」と称し、それ以外は「宗」を称するようになった。これはなぜだろうか、とまた問いを立てる。

李唐より制を變じ、祇だ開代の一君を以て之に名づけて「祖」と爲し、其餘は俱に名づけるに「宗」を以てす。此れ是れ何の故ぞや。蓋し以爲らく「祖」・「宗」二字は『禮記』の祭法に肇^{はじ}まる。祭法は「宗」を重んず。「宗」なれば則ち必ず天子の身を以て之に當^あつ。開代創起の功を以て號を立つる者と同じからず。故に創起の君・諸侯士庶と夫の匹夫にして興る者とは皆な「祖」と稱す可し。而るに「宗」とするは必ず身 帝と爲る者なり（「大禮議」卷二・二十四葉）。

「祖」・「宗」の二字は、『禮記』祭法にはじまる。この『禮記』祭法は、「宗」を重視している。「宗」であれば必ず天子をそれに組み合わせる。王朝を開く功績を持つ者に対する称号とは異なるのである。したがって、創業の君・諸侯士庶と匹夫にして興る者とはすべて「祖」と称することができる。しかし「宗」と称するのは必ず皇帝となった者だけである、と考える。

つづけて、毛奇齡は、『禮記』祭法を引用してつぎのようにいう。

是を以て祭法に、三代「夏后氏 顓頊を「祖」とし、禹を「宗」とす」(『禮記』祭法)と、則ち「祖」と「宗」とは皆な帝なり。「殷人 契を「祖」とし、湯を「宗」とし、周人 文王を「祖」とし、武王を「宗」とす」(『禮記』祭法)、則ち「祖」は皆な帝に非ずして、「宗」は則ち必ず帝なり。誠に三代の「宗」法は、君は即ち是れ「宗」とし、一の「祖」を除くの外、餘は皆な「宗」と爲す。惟だ前君のみ今君の「宗」と爲るのみならず、今君も即ち後君の「宗」なり。是を以て身は「宗」と稱され、前後の君も皆な「宗」を稱さる(「大禮議」卷二・二十四葉)。

①『禮記』祭法のこの条に鄭玄は「五帝・五神を明堂に祭るを「祖」・「宗」と曰う。「祖」・「宗」は通じて言うのみ」と注している。

こういうことなので、『禮記』祭法には「有虞氏は、顓頊を「祖」とし、禹を「宗」とし[て祭った]」という。「祖」と「宗」とはすべて帝(禘：昊天上帝を圓丘に祭る)の祭りのことである。また、「殷人は契を「祖」とし、湯を「宗」とし[て祭り]、周人は文王を「祖」とし[て祭り]、武王を「宗」と[して祭った]」という。つまり、「祖」はすべてが帝ではなく、「宗」は必ず帝なのである。三代の宗法では、君は「宗」であり、一人の「祖」を除いて、のこりはすべて「宗」ということになる。前の君主のみ「宗」とするのではなく、今の君主も、後の君主の「宗」である。こういうわけで自身は「宗」と称され、その前後の君主も「宗」と称されるのである。

毛奇齡によると、唐代になって、その「宗」についての儀礼が変更され、最初に王朝を開いた者を「祖」と称し、それに続く皇帝には「宗」を付するようになったという。

また、程瑤田(字は易田、又の字は伯易・易疇。安徽歙縣の人。清・雍正三年(一七二五)～嘉慶十九年(一八一四)。乾隆三十五年(一七八〇)の挙人)は、「宗法(本家(大宗)と分家(小宗)との宗族関係を示す法)」についての經學的な立場から「宗」について検討する。

まず、程瑤田は、宗法というものは、天子・諸侯にも適用できるものだろう

か。また、『書』無逸・説命上などに「中宗」・「高宗」とあるのは、天子が「宗」をつけて称されることを示し、『詩』大雅・公劉に「之に君とし之に宗とす」とあるのは、諸侯が「宗」をつけて称されることを示しているのだろうか、と問いを立てる。

或者 謂う宗法は天子・諸侯に通ぜんか。『書』（無逸・説命上）に「中宗」・「高宗」と言うは、則ち天子 「宗」と稱するの事にして、『詩』（大雅・公劉）に「君之宗之（之に君とし之に宗とす）」と言うは、則ち諸侯 「宗」と稱するの事なるか（『通藝錄』通藝錄之三・宗法小記・「宗法述」条）。

それに対して、つぎのように答える。

余（程瑤田）曰く、天子・諸侯の「宗」と稱するは、宗法の謂いに非ざるなり。宗法は『禮記』「大傳」及び『禮記』「喪服小記」に載せ、其の節目を列し、其の指歸を明らかにするなり。大宗・小宗の名有り、遷と不遷との別有り。又た之が爲に宗道の窮に通じ、立宗の始めを究む。此れ所謂ゆる宗法なり。宗法とは、大夫・士を天子・諸侯より別つ者なり。公子（分家（小宗）を立てる立場にある諸侯の子）先君を禰（廟に祖として祀る）するを得ず、公孫（分家（小宗）を立てた公子の子）諸侯を祖とするを得ず。宗法 無からしむれば、則ち支分（分派）派衍（宗族・支派が氾濫する）し、統ぶる所無し。[その結果] 諸侯 將に以て其の國を治むる無からんとし、天子 將に以て其の天下を治むる無からんとす。故に宗法なる者は、大夫・士の爲に之を立て、以て上は夫の天子・諸侯を承けて、其の家を治める者なり（『通藝錄』通藝錄之三・宗法小記・「宗法述」条）。

天子・諸侯でいう「宗」と称するものは、宗法でいう「宗」ではない。宗法については、『禮記』大傳や喪服小記に記載されており、その条目や主旨が明らかにされている。そこでは、「大宗」・「小宗」の名称や、「遷（合祀）」・「不遷（独立したままで祀る）」の区別が示される。そのために宗道（宗法の原則）に最後まで通じ、宗法を始めから究めることができる。これが、いわゆる宗法で

ある。宗法は、大夫・士を天子・諸侯から分けるものである。公子（分家（小宗）を立てる立場にある諸侯の子）は、先君（先の君主）を禰（廟に祖として祀る）することができないし、公孫（分家（小宗）を立てた公子の子）は、諸侯を「祖」として祀ることはできない。宗法がなければ、分家が分かれて氾濫してしまい、統一がとれなくなる。その結果、諸侯は国を治めることができなくなり、天子は天下を治めることができなくなる。したがって、宗法というものは、大夫・士のために設けられたものではあるが、上は天子・諸侯にまで及んで、家を治めるものなのである。

夫の太戊の「中宗」と稱するは、[孔安國の] 傳 以て「殷家中世にして其の徳を尊ぶ。[故に宗と稱す]」（『尚書』無逸）と爲せばなり。武丁の「高宗」と稱するは、[孔安國の] 傳 以て「徳の高くして尊ぶ可し。[故に高宗と稱す]」（『尚書』説命上）と爲せばなり。皆な宗法と與^{あず}かる無し。[『詩經』大雅の] 公劉の詩[の「君之宗之（之に君とし之に宗とす）」の条]に至れば、毛氏の傳に以て「之を大宗と爲す^①」と謂う。而して鄭箋は則ち「羣臣 之を尊ぶ^②」と曰う。傳を易^かうる所以の者は、國君の尊きを以て、「族人 敢えて其の威を以て君に威^{ちか}ずかず」（『禮記』大傳^③）。當に大小の宗の名有るべからざるなり。故に毛氏は[『詩經』大雅の] 板の詩[の「大宗維翰（大宗は維^これ翰）」条]に亦た「王者は天下の大宗なり」と曰う。而して鄭箋は亦た之を易^かえて、以て「大宗は、王の同姓[世]の適子なり」と爲す。「同姓[世]適子」とは、所謂ゆる「別に繼ぐを[大]宗と爲す」（『禮記』喪服小記）なる者なり王子は大夫と爲し、亦た別子なり（『通藝錄』通藝錄之三・宗法小記・「宗法述」条）。

①毛傳は「爲之君、爲之大宗也（之を君と爲し、之を大宗と爲すなり）」。

②鄭箋は「宗、尊也。公劉雖去郤國來遷、羣臣從而君之尊之、猶在郤也（宗は、尊なり。公劉 郤國を去り來り遷ると雖も、羣臣 從いて之に君とし、之に尊ぶ。猶お郤に在るがごときなり）」。

③『禮記』大傳に「君有合族之道、族人不得以其戚戚君位也（君 族を合わす道有り）。

族人 其の戚を以て君の位に^{ちか}戚ずくを得ざるなり」とあり、鄭玄注に「君恩可以下施、而族人皆臣也。不得以父兄子弟之親、自戚於君。位謂齒列也。所以尊君別嫌也（君恩以て下施す可し。而るに族人は皆な臣なり。父兄・子弟の親を以て、自ら君に^{ちか}戚づくことを得ず。位とは、齒列を謂うなり。君を尊び嫌を別つ所以なり）」。

太戊を「中宗」と称するのは、『尚書』孔安國の傳に「殷室は中期のものとしてはこの人の徳を尊ぶ」からだとする。武丁を「高宗」と称するのは、『尚書』孔安國の傳に「徳が高くて尊び得る」からだとする。これらは「宗法」とはかわりがない。『詩經』大雅・公劉で「君之宗之（之に君とし之に宗とす）」というのは、毛亨の傳では「之を大宗（本家）と爲す」の意味だとしているが、鄭玄の箋では「羣臣が之を尊ぶ」の意味に取り換えている。毛亨の傳の解釈を変更したのは、尊い国君は、「族人は父兄・兄弟の親しさをもって君に近づけない」からである。「大宗」・「小宗」の名称として理解すべきではない。したがって、『詩經』大雅・板の「大宗維翰」条の毛亨の傳に「王者は天下の大宗なり」と解釈するのを、鄭玄の箋では「大宗は、王の同姓〔世〕の適子なり」という解釈に取り換えている。ここでいう「同姓〔世〕適子」とは、『禮記』喪服小記でいう「別に繼ぐを〔大〕宗と爲す（別子（諸侯の庶子）の跡を繼ぐものを大宗という）」というのである。

天子・諸侯の若^{ごと}きは、則ち固より其の宗名を絶つ。惟だ『詩經』大雅・板の「宗子維城（宗子は維れ城）」に、鄭氏は以て「王の適子（嫡子）」と爲す。蓋し「宗」とは、主なり。即ち『易』震卦の「象傳の所謂ゆる「守宗廟・社稷以爲祭主（宗廟・社稷を守り以て祭主と爲る）」、『春秋』傳の里克の所謂ゆる「太子奉冢祀・社稷之粢盛（太子は冢祀・社稷の粢盛を奉ず）」（『左傳』閔公二年）と、而して土薦以て「修徳以固宗子（徳を修めて以て宗子を固くす）」（『左傳』僖公五年^①）と爲す者なり。皆な宗法の謂いに非ず。『禮記』祭法に「有虞氏は〔……〕堯を宗とし、夏后氏は〔……〕禹を宗とし、殷人は〔……〕湯を宗とし、周人は〔……〕武王を宗とす」と。此れ上帝を明堂に祭り、之を尊んで以て配食す。『孝經』の所謂ゆる「宗祀に

は文王を明堂に於いて以て上帝に配す」と、是れなり金輔之の「明堂考」に「宗祀の名は、六宗に^{はじ}昉まる。夏侯の「尙書」に六宗上下四方の神を説くに據る」と言う。蓋し「宗」の言は尊なり。凡そ尊ぶ所有れば、皆な「宗」と曰う可し。『孟子』に稱して、滕の父兄百官 曰く、吾が宗國魯の先君、と（『孟子』滕文公上^②）。亦た兄弟の國を謂いて之を尊ぶなり。豈に宗法を以て之を例とするを得んや（『通藝錄』通藝錄之三・宗法小記・「宗法述」条）。

①『左傳』閔公二年には「士薦稽首對曰、……『詩』云「懷德惟寧，宗子惟城」，君其修德而固宗子，何城如之……（士薦 稽首して對して曰く、……『詩』に云う「德を懷き惟れ寧んず，宗子 惟れ城なり」と，君 其れ德を修めて宗子を固くす）……」。

②滕は魯と同じ文王の子孫であるが，魯の祖の周公は滕の祖の叔繻より年長であるため，滕は魯を宗國といった。

天子・諸侯は，もともと「宗法」でいう「宗」の範疇には属さないものである。ただし、『詩經』大雅・板の「宗子維城（宗子は維れ城）」条に鄭玄は「王の適子（嫡子）」であると理解する。おそらく，ここでいう「宗」とは「主」の意味であろう。『易』震卦・彖傳でいう「守宗廟・社稷以爲祭主（宗廟・社稷を守り以て祭主と爲る）」や、『左傳』閔公二年の里克の諫言の中の「太子というものは国の宗廟・社稷の祀りの供え物を奉じる」ということば，そして『左傳』僖公五年にある士薦の「德を修めて宗子（嫡子）を守りたてる」ということばのようなものである。これら「宗」の意味は，すべて「宗法」の意味ではない。『禮記』祭法に「有虞氏は〔……〕堯を宗とし，夏后氏は〔……〕禹を宗とし，殷人は〔……〕湯を宗とし，周人は〔……〕武王を宗とす」とあるが，これは上帝を明堂に祭り，堯・禹・湯・武王を尊んで並べ祭ることである。『孝經』でいう「宗祀には文王を明堂に於いて以て上帝に配す」である。おそらくここでいう「宗」は「尊」の意味であろう。すべて尊ぶところであれば「宗」ということができるのである。『孟子』に滕の父兄百官が「吾が宗國魯の先君」と言っているのは，兄弟の國を尊んで「宗」と言っているのである。「宗法」の例と

することはできないのである。

このように、いわゆる經學的な立場からすると廟號の「宗」は「宗法」における「宗」とは関係しないことになる。ただし、この經學的な立場からの「宗」字は、永樂帝の廟號を「太宗」から「成祖」に改めた世宗嘉靖帝の時に、議論されることになる。このことについては、(2) で検討したい。

さて、遺漏はあると思われるが、管見のおよぶところ、正史に見える「太宗」は、以下のようである。

殷	太甲	太宗
漢	孝文帝	太宗
晉	簡文帝	太宗
宋	明皇帝	太宗
梁	簡文帝	太宗（世祖による）
北魏	明元皇帝	太宗
唐	太宗	
五代閩	惠皇帝	太宗
宋	太宗	
遼	太宗	
金	太宗	
元	太宗（オゴタイ）	

いま、殷の太甲を太宗とした例を除くと、皇帝に「太宗」と贈ったのは、前漢の文帝が最初ではないだろうか。

『漢書』景帝紀（『史記』孝文本紀もほぼ同文）によると、文帝を「太宗」と称するようになったのは、つぎのようなことによる。

〔景帝〕元年（前元年）冬十月、詔して曰く、蓋し聞く「古者 祖に功有り、宗に徳有り」とし、禮樂を制するに各々^{ゆえ}由有り。〔……文帝はいろいろと

すぐれた政治上の業績をあげられたが……], 朕 既に不敏にして, 能く識るに勝えず。此れ皆な上世の及ばざる所にして, 孝文皇帝⁽⁴⁾ 親^{みづ}から之を行なえり。徳の厚きこと天地に侔^{うらお}し, 利の澤^つうこと四海に施し, 福を獲ざるなし。明らかなること日月に象するも, 廟樂^{のつとる} 稱^{そえ}られず, 朕 甚だ^{これ}焉を懼る。其れ孝文皇帝廟^{ため}の爲に昭徳の舞^{つく}を爲り, 以て休徳を明らかにせよ。然る后, 祖宗の功德は, 萬世に施され, 永永として窮まる無し。朕 甚だ之を嘉す。其れ丞相・列侯・中二千石・禮官 禮儀を具えて奏せよ, と。[……そして丞相の[申屠] 嘉などが] 謹みて議するに, 世々の功は高皇帝より大なるは莫く, 徳は孝文皇帝より盛んなるは莫し。[そこで] 高皇帝廟は宜しく帝者の太祖廟と爲すべし。孝文皇帝廟は宜しく帝者の太宗廟と爲すべし。天子は宜しく世世 祖宗の廟に獻ずべし。郡國の諸侯は宜しく各々孝文皇帝の爲に太宗の廟を立て, 諸侯列侯の使者 天子の獻ずる所の祖宗の廟に侍祠すべし。天下に宣布せんことを請う, と。制して曰く, 可なり, と(『漢書』景帝紀)。

景帝元年(前元年)十月, 景帝はつぎのような詔をくだす。それは, 聞くとところによれば, むかしは功績のあるものを「祖」とし, 徳のあるものを「宗」とし, [これらの廟をまつる] 禮樂を制定するのには各々理由があったとのことである。[……文帝はいろいろとすぐれた政治上の業績をあげられたが……], 朕(景帝)は不敏で, すべてを知っているわけではない。[そうとはいうものの] 文帝が行なわれたことは, いにしえの君主のおよぶところではない。しかも文帝は自身でこれを行なわれたのである。[帝の] 徳は天地と等しく, [帝の] 利澤は四海に施され, 福を得ないものはいなかった。その明は日月に匹敵する。だが,

(4) 漢代の皇帝の諡には, 惠帝以下すべて「孝」字が附せられていた。『漢書』惠帝紀の「孝惠皇帝, 高祖太子也」条に顔師固(南朝・陳の太建十三年〔五八一〕～唐の貞觀十九年〔六四五〕)は,

[顔] 師固 曰く, 孝子 善く父の志を述ぶ。故に漢家の諡は, 惠帝以下 皆な「孝」と稱するなり(『漢書』惠帝紀・「孝惠皇帝, 高祖太子也」条)。

と注している。「孝子」であり父の志を遂げたから, 諡の上に「孝」をつけるというのである。

文帝の廟の樂はこうした徳にふさわしくない。朕（景帝）は、はなはだそれをおそれる。文帝のために昭徳（徳を昭にする）の舞を作り、文帝のおおきな美徳を明らかにせよ。そうすれば祖宗の功德は、万世に施され、永遠に窮まりなくなるであろう。朕（景帝）は、それをきわめて嘉するであろう。丞相・列侯・中二千石〔を受ける高官〕・禮官とともに「昭徳の舞」の儀礼を具えて奏上せよ、と。……そして、臣等〔丞相の申屠嘉など〕は謹んで提案いたしますに「功は高皇帝（高祖）より大きいものはなく、徳は文帝よりも盛んなものはありません。そこで高帝廟はよろしく皇帝としての太宗の廟となさるべきであり、文帝廟は皇帝としての太宗の廟となさるべきであります。そして、天子は世々祖宗の廟をお祀りになるべきであります。郡国・諸侯はよろしく文帝のために太宗の廟を立て、諸侯王・列侯の使者は、天子のされる祖宗の廟の祭祀に侍してたすけるべきです。このことを天下に布告されることをお願いもうしあげます」と。景帝は、これを裁可した、という。

この「古者 祖に功有り、宗に徳有り」については、顔師固（南朝・陳の太建十三年〔五八一〕～唐の貞觀十九年〔六四五〕）は、つぎのように注している。

應劭 曰く、始めて天下を取る者を「祖」と爲す。高帝 高祖と稱するは是れなり。始めて天下を治める者を「宗」と爲す。文帝を太宗と稱するは是れなり、と。〔顔〕師固 曰く、應〔劭〕の説は非なり。「祖」は、始なり。始めて命を受くるなり。「宗」は尊なり。有徳 尊ぶ可し、と。

應劭は始めて天下を取った者「祖」といい、始めて天下を治めるようになった者を「宗」とするという。顔師固は、應劭の説を否定し、始めて天命を受けた者が「祖」であり、徳があり尊ぶべき者が「宗」であるという。

つまり、應劭によれば、

はじめて天下を取った功績のあるものを「祖」とし、はじめて天下に治平をもたらしたものを「宗」とする。

となり、顔師固によると、

天命を受け取ったものを「祖」とし、徳があり尊ぶべきものを「宗」とする。

という意味になる。

王先謙（字は益吾，号は葵園。湖南長沙の人。清・道光二十二年〔一八四二〕～民國六年〔一九一七〕。同治四年乙丑科〔一八六五〕二甲七十五名の進士）の『漢書補注』（光緒二十六年刊）は、宋・劉攽と王啓原（字は理菴。湖南湘潭の人：『漢書補注』『同時參訂姓氏』による）とを引用して顔師固の説を批判・補足する。

劉攽 曰く、顔〔師固〕の説は非なり。始めて命を受くる者は「太祖」と稱するのみ。有功なる者も亦た「祖」と稱す。商の祖甲 是れなり、と。
王啓原 曰く、「祖有功、而宗有徳」は『孔子』家語^①廟制篇に以て孔子の言と爲す。據るに足らずと雖も、『後漢書』光武帝紀注に其の文を引きて、「禮に云う」^②とす。蓋し佚禮の文ならん。

①廟制篇に「孔子 曰く、…古は有功を「祖」として有徳を「宗」とす。『孔子家語』辯物篇に「子 曰く禮に有功を「祖」として有徳を「宗」とす。故に其の廟を毀たず」。

②『後漢書』卷一・光武帝紀第一上・「世祖光武皇帝諱秀，字文叔」条の李賢注に「禮に「祖に功有り，宗に徳有り」と。光武 中興す。故に廟を「世祖」と稱す」。

劉攽によると、始めて天命を受けた者のみが「太祖」という。その他の功績がある者は、創業の主でなくても、商の祖甲のように「祖」をつけることができる^⑤というのである。

(5) 王榮商（浙江鎮海の人。光緒十二年丙戌科（一八八六）二甲十五名の進士）の『漢書補注』（光緒十七年刻本）は、顔師固・劉攽の注釈を引用した後、つぎのようにのべる。

〔王〕榮商 案ずるに、光武 中興して、亦た「世祖」と稱せらる。其の時、漢の祚絶えて復紹す。始めて命を受くると異なる無し。故に「祖」を以て之を尊ぶのみ。劉〔攽〕の説は、孔氏（孔安國）の書傳に本づく。孔氏（孔安國）「祖甲爲太甲」を以て「殷家 亦た其の功を祖とす、故に「祖」と稱す」、と謂う（無逸）。然れども「正義」（「無逸」・「其在祖甲～三十有三年」条の疏 已に之を非として「殷の先君に祖乙・祖辛・祖丁有り。「祖」と稱すること多し。未だ必ずしも其の功を祖とし、其の廟を存せず」と云う。此れを以て之を推せば、殷人の「祖」と稱するは、別に取義有り。古今 制を異にす。未だ據りて以て顔〔師固〕の説を駁す可からざるなり（光緒十七年刻本『漢書補注』卷一・十三葉・「元年冬十月，詔曰，蓋聞古者祖有功，宗有徳」条）。

殷で「祖」と称したのは、以後のものと意味が異なり、制度を異にしている。そのため、殷の事例を根拠にしておこなった劉攽の顔師固の説の批判は成立しない、と王榮商はいう。

『漢書』・『史記』にある「宗」を「はじめて天下に治平をもたらしたもの」と理解するのか、「徳があり尊ぶべきもの」と理解するのかは、断定しにくい。

だが、いずれにせよ、唐・宋・遼・金・元そして清においても、初代の「祖」を贈られた皇帝に続く二代目の皇帝に「太宗」が贈られていることからすると、漢の先例にしたがい、唐以後は、二代目の皇帝に「太宗」という廟號が贈られるようになったのではないだろうか。

このような先例からみても、世宗嘉靖帝が永樂帝の廟號を「太宗」から「成祖」に変更したのは、きわめて異例のことであることが理解できるのではないだろうか。

では、つづけて、永樂帝の廟號を世宗嘉靖帝がなぜ変えたのかについて検討してみたい。

(つづく)